

問いをもち、願いを明らかにしながら追求意欲を高める子ども

— 小学4年「水の世界をのぞいてみたら」の実践から —

1 題材のねらい

水の中をのぞき込んだ時に見える世界の絵を描く活動において、水の中に広がる世界の様子やそこにいる生き物などの特徴を考える。ニスの透明感を利用した表現方法について、水の底や水の中や水面など描画面の重なりに注目し、発想や構想を広げたり深めたりしながら、感性を働かせて造形表現を追求することができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本学級の子どもたちは、感性を働かせながら表現テーマや素材などの対象と好奇心旺盛に向き合うことができる。また、体験したことをいかして自由に試行錯誤を重ね、自分の考えや友だちの取組の様子を取り入れながら、表したいことを追求することができる。考えたことや感じたことを文章に表したり図やイラストに表したりすることに長けている子どもも多い。

次の文章は、「ふしぎな種からすてきな花がさくよ」4時間目の学習活動後の日記である。

今日、図画工作では、ふしぎな種をうえて絵をかきました。わたしの種は、チョコレートだから、チョコレートの花や、葉や、実にしよと思いました。土はダンボールをはって、その上に、種をはりました。土で工夫したところは、根です。わたしは、せっかくふしぎな種だから、根も工夫しようと思って、根にもチョコレートをつけてみました。つけてみたら、よりふしぎになって、明るく仕上げることができましたのでよかったです。絵は、くきをふわふわにして、えだの先に、虫よけのシャボン玉をかきました。まだ、全部はかけていないけど、次の時は下絵をかんせいさせて、色をぬっていきたいです。
(児童A)

児童Aは、ダンボールを土に見立てて、そこにふしぎな種を貼ることをアイデアとして出している。植物の根にも工夫をすることで、よりふしぎに、明るく仕上げることができ、取組に満足する様子が見られた。チョコレートが好きなことに関わってどのようにすればよりよく表すことができるかという問いをもち、表したいことに対して追求して行く姿勢がうかがえる。

(2) 本題材の内容と図画工作科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

一人一人が問いをもつとは、自分の考えの価値やよさを拠り所としたり、他者と共有した価値やよさに基づいたりして、自分の造形表現を問い直すことであると考え。そのためには、一人一人の子どもが、表したい事柄について確かな願いをもつこと。その上で、自己の造形表現の目的を達成するために、感性を働かせて自分や他者の造形表現や表現意図に問いかけを行うことが大切である。

追求する姿とは、見いだしたことや過去の経験や技能を駆使しながら、目的を達成するために新たな表現を獲得しようとする姿であると考え。

自分の取り組みのよさを認め、他者から表現のよさを認められる中で、達成感を味わうという造形表現活動の中に見られる姿であると考え。

本教材では、ニスを塗り重ねることで透明な層を作り、水の底や水の中など段階的に描画を施す。すると、描画面が重なり、まるで奥行きのある水のように見える。画材には不透明水性顔料インクのマーカーペンを使用する。これにより、子どもでも簡単にニスの上に絵をかくことができる。また、サトウキビの紙皿を使用する。ニスを一度下塗りすることで、強度が保たれ、ニスがしみ出

し漏れることを防ぐことができるよさがある。子どもの学習を支える教材を用意することができる。

本題材では、水の中や水面を表せるこの表現方法に出会う。そして、表現方法のよさを手がかりにして表現テーマに沿って考える活動から始める。次に、プール掃除で見つけた水棲生物の様子を見て楽しんだり、のぞき込むという行為から水中の様子に興味関心を高めたりする。そして、表現テーマに合わせて水底や水中、水面の様子を思い描く。また、それぞれの層に描かれるもの同士を関連付けるなどして、発想を広げたり構想を深めたりしながら、絵に表す活動を行う。先述した本学級の子どもたちの実態を踏まえ、本題材は追求する意欲や態度を引き出すことに適していると言える。

(3) 本題材の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について

○子どもが自らの学びを自覚できる図画工作の授業作り

自分がどんな追求をしたのかが見えてくるようなふりかえりをする。

導入場面では子どもに教師が作成した作例を出会わせる。表現方法の不思議さや水の表現の魅力に興味をもち、どのようにしたら表せるのか、何を使ったらそのように表せるのかを見つけ出せるようにしたい。そして、材料や表現方法に出会うと共に、実際の水棲生物の様子を間近に観察したり、これまでの生活体験から表したいことを見つけ出したりする過程を大切にする。感性を豊かに働かせて自由な発想の元で水の中の世界のストーリーや、生き物などの色や形の特徴を追求させたい。

導入時の学習のめあては「のぞき込んだ水の中の世界で何を見つけたかはっきりさせよう」とする。活動の終わりにはめあての視点に基づいたふりかえりを行う。そこでのふりかえりは「見つけたことや表したいことをはっきりさせることができたか」となる。そして、次時に向けては「見つけたことの感動を伝えるためには何をどのように描きたいか」と問いかけることができる。教師は、このふりかえりの視点に立って、子どもたちに自分の考えや友だちの考えのよさを気付かせ、自分の考えがどのように明らかになったのかを問いかけるようにする。

子どもは、この学習活動の中でどのような追求ができたのかをつかみ、自分と友だちの考えや取組を比較したり検証したりすることができる。その中で次の学習活動「みんながのぞきこみたくなるように描こう」への見通しをもち、意欲を高めながら、自らの学びを自覚するに至ると考える。

子どもが気づきを獲得する、素材体験や試行錯誤が十分にできる授業作りをする。

本題材に於いて、素材体験を味わい、造形表現のための試行錯誤を十分に行いたい場面は幾つか予想される。

まず、教師が絵の上にニスを流し込む様子を見せることで、子どもが製作の方法や手順についての見通しをもつ場面がある。また、のぞき込むという仕草から引き起こされるワクワクするなどの気持ちやその際に見つけた事柄についての感動や驚きなどの感情について、子ども一人一人がワークシートに図や絵、文を用いて表す場面が考えられる。また、水の底、水の奥、水の中、手前の様子、水面など、描画をするそれぞれの層について、トレーシングペーパーを用いて実際に描き、絵を重ねてみる。そうすることで、アイデアが具体的に見えるようになり、イメージを膨らませながら、工夫することができる。自由に描き表しながら考えを確かなものにしていく過程を大切にしたい。

また、子どもの感性は豊かであるので、土などの異素材の活用気付いたり、ニスに着色するという発想にたどり着いたりすることも考えられる。

教師は、それぞれの学習場面の中で、子どもの気づきや考えに対してその考えの根拠を深く問うなど、掘り下げるといはたらきかけを行う。また、子どもの追求意欲を刺激するように多様な見

方や考え方を視点という形で示し、子どもの気付きや考えを学習集団全体につなげて行くような、提案するというはたらきかけを行う。

教師のはたらきかけに伴い、子どもは自分が表したいことについての問いをつかむ。また、記録物や製作物、製作活動を通して、自らの問いと向き合うことで自分自身の表現したいことが明らかになる。これにより、学びの自覚が促され、造形活動に対する意欲が高まり、表したいことに向かって熱心に描こうとする姿、すなわち、追求する姿を引き出すことができると考える。

3 展開計画（全7時間）

次	時	主な学習内容	◇追求する子どもの姿
1	1 2	○どうやって表しているのかな ・水のように見える表し方に出会い、その仕組みや表現の面白さを見つける。 ○水の中の世界を考えよう ・水の表し方を生かして、のぞきこんだ時に見える水の世界を考える。	◇本物の水みたいに見える表し方がありました。ニスは何回も重ねていく方法はおもしろいです。厚さがうすくても奥が深く見えました。上からのぞいた感じがいいな。 ◇田んぼの中で泳ぎ回るオタマジャクシの世界を表したいです。とてもたくさんいて、遊んでいるような絵をかきたいし、生き物をたくさん描いて工夫したいです。
2	3・4 5 6 7	○表したいことをはっきりさせよう ・水の世界の様子を考えながらイメージ文・図やイラスト（ストーリー）に表し、下絵を描く。 ○絵の重なりを生かしてかこう ・絵の重なりなどのよさを生かしながら、水の世界を絵に表す。 ・水の底、水の奥、水の中や水面などの層について考える ○みんながのぞきこみたくなるような工夫をしよう ○作品のよさを味わって学習をまとめよう ・これまでの活動を振り返って、考えてきたことや表し方の良さについて作品を見ながらまとめる。	◇水の底と、水の中を2段分、それから水面の様子について、トレーシングペーパーにかきました。重ねた時に絵が集まりすぎていたから、空いている所にもう少し生き物をつけ加えたいです。 ◇深海の様子を表したいです。暗い海の様子をどうしたら表せるか困っています。黒の絵の具をおくりにぬってみようかな。 ◇水の底にいる生き物が少しかくれるように、水草を描きました。どのくらい描くか迷いました。次の段でも付け足せるし、重なったように見えるから少なめにしてみました。描いてみたら、生き物がかくれんぼをしているように見えたので、楽しい感じになりました。もう少し工夫してみたいです。

4 授業の実際

本題材の表現テーマ「水の中の世界を表す」ことについて、バケツの中のトンボのヤゴを観察したり、作例を見てどのように作っているのか予想したりすることで、子どもたちは、自分の発想を広げ、考えをはっきりさせながら、造形表現の活動について見通しを持つことができた。

以下に示す文章は、1次2時間目の授業後の日記である。

今日、紙皿を使って、絵をかくことの、絵をイメージしてみました。みんな、イメージがうかんできたけど、私は、テーマが「水の中のをのぞいてみたら」だったので、私は海の中をイメージしてみると、さいしょにうかんだのが、魚のむれが、クジラに食べられないようににげるすがたでした。絵をかくと、クジラの顔の部分はどうしたらもっとはくりよくがつか分らなかったけど、体の半分からクジラのどう体が見えるといいということが分かったので、このことを生かしたいです。私は、土絵の具も使いたいのでもうまききれいに生かしながら作りたいです。
(児童B)

児童Bは、表したいことのイメージを文章に書いたり、図に描いたりしてはっきりさせていく中

で、自分の考えや願いをはっきりとさせていき、造形表現への意欲を高めている（図2）。

これらの文章とともに、ふり返りや図はポートフォリオとして蓄積させている。常に確認しながら進めることができるので、自分が今何をしたいと願っているのか確かめながら、表したいことをつかんだり、発想を広げる手がかりとしたりすることができる。学びを自覚する上で有効な手立てであった。

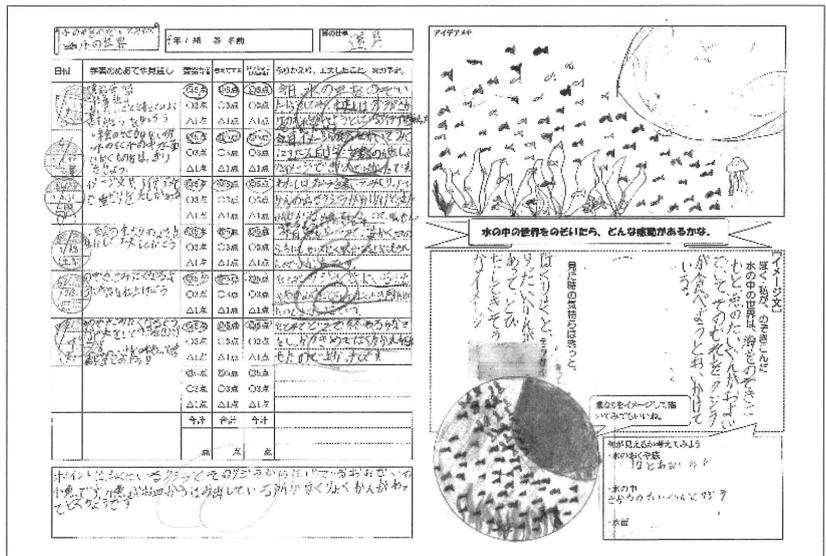


図2：ふり返りカード（ポートフォリオ）

1次では表現テーマや表現方

法との出会いの活動を受けて、表したいことについての構想を立てる活動を行った。実物の水の中をのぞきこんでイメージを膨らませたり、友だちと考えを共有したりする中で、次第に自分が表したいことを見つけ出していく姿があった。

教材研究に当たっては、描画材に使用する紙皿には変形しにくいトウモロコシ素材で厚手のものを選び、事前にニス塗布し下地を作っておいた。また、水性ウレタンニスとの相性を考えて、水性顔料インクの極細タイプのペンを用意した。にじんだり変形したりすることを抑える効果がある。また、ワークシートの構成としては、トレーシングペーパーを用いて絵の重なりを視覚的に確かめることができるようにした。トレーシングペーパーを重ね、観音開きのように開いたり閉じたりする事ができたので、組み立てを変えたり、絵の順序を考え直したりすることができた。4年生の児童にとっても作業手順を捉えやすく、自分の追求について見通しが持ちやすかった。これらのように、素材やワークシートについて吟味することも、児童の学習を支える環境として大きな成果を得たと考える。

教師はワークシートや子どもの言葉を手がかりにして「掘り下げる」はたらきかけを行い、子どもが自分の表現意図や心情などと、作品のつながりを意識し、自らの学びを自覚しながら造形表現の追求を進めるようにした。子どもは学びを自覚するほどに、表したい事柄について強い願いをもつようになる。造形表現の活動に対して高い意欲を示し、持続することができる。次の活動へ連続して行くように、活動の見通しをもつことができた。

ふりかえりからめあてにつなげるためには、具体的に何をを目指すのかということ、ふりかえりの場面に学級全体で明らかにしておく必要がある。学級全体で目指すものが明らかになると、それが次の学習でのめあてに連動しうるものになる。その中で、子どもは、自分の作品に対して何をしたいのかを問いとして再びつかみ、個の追求を持続させることができる。

また、子どもが既習の知識や技能、それまでの経験を生かして造形表現を追求するためには、子どもの必要感に応じて、試したり取捨選択したりする機会を保障することが大切である。必要感そのものを刺激したり、試したいことの幅を広げたりする上で、「提案する」ことは有効である。

2次では、1次で考えたことをワークシートに表す活動から行った。作品の構想に当たるイメージ文や図を書くことで、紙皿の中に絵を描き始める際にスムーズに描き始めることができた。特に水の中をおおよそ3層に分けて捉え、水の底（奥）、水の中、水面のように、奥行きを構成をイメージしたり、描くもの手順をはっきりさせたりすることに有効であった。中には以前に扱った

学習題材の土絵の具を持ってきて、水の底や岩の質感を表現しようと試す子どもの姿もあった。子どもが過去の経験を生かして取り組んだと言える（図3）。

この活動では、紙皿の中に絵を描き、ニスを通して乾燥させてはまた描くという手順をくり返している。ニス自体に染料インクで着色することや、顔料インク極細タイプのペンで容易に描くことができるので、それらのもたらず視覚的な効果や画材の特長を生かしながら、表したいことにじっくりと向き合うことができた。

次の文章は、2次5時間目の授業後の日記である。



図3：構想を確かめながら製作に取り組む姿

今日、休み時間の時に、自分が作っている紙皿の作品に、ニスをぬりました。私は、はくりよくがあって、外に飛び出してきたようなイメージにしたいので、ニスの色は、クジラが一番の主役なので、ニスの色で、クジラが見えなくならないように、少しすすめの水色にしました。私は、ニスをぬってみて一つ後かいたことがあります。それは、ポスカで色をぬったところがまだかわいていないのに、ニスをぬってしまったことと、ポスカで色をぬる時に、ガリガリほりすぎてしまって、ニスをぬってかわかしたら、ヒビが入ってしまったので、次は、ていねいにぬろうと思いました。はくりよく感と立体感を出して、目を引くような作品にしたいです。

（児童B）

児童Bは、表したいと考えていることを踏まえて活動を見直し、自分の取り組みから学びを自覚しながら次時の活動に向かおうとしていることがうかがえる。画面に迫力を出すにはどのようにしたらよいかということを追求している姿がある。

次の文章は、6時間目の授業後に書かれた日記である。

今日、図工では紙皿の絵のつづきをしました。わたしは、はく力のイメージを表したかったので、はく力を出すにはどうすればいいか考えてみました。すると、わたしは、一つはく力が出るためのコツが分かりました。それは、小魚を、ふちにもあふれ出すようにかくことです。ふちにも小魚をかかなかつたら、水そうに閉じこめられた感じがするので、外へ外へと飛び出して、あふれていく感じで絵をかきました。今日完成した部分を見たら、しっかりとはく力感が出ていて、友だちにも何を表したいのかがちゃんと伝わっていたし、今日見に来られたお客さんも、「わあ、はく力があってすごいねえ。」とほめてもらうことができたので、よかったです。今日、わたしは、友だちのいい所やコツをまねしながら自分が表したいことを伝えることができたので、よかったです。この調子で、すてきな作品を仕上げたいです。

（児童B）

児童Bは、作品に迫力を出すための解決策を見出している。紙皿の縁を利用し、くじらを囲むようにたくさんの小魚を放射状に配置して描き込んでいる。構図の理論を知っているの始めからの構成ではなく、描きながら考え、見直しを図りながらイメージを膨らませていく試行錯誤の末につかみ取ったことによるものである。

作品づくりの終わりには、作品を掲示し鑑賞する時間を持った。自由な発想で思い思いに描いた絵を味わい楽しみ、感想を伝え合う姿も見られた。

5 おわりに

図画工作・美術科の授業の中で、子どもが問いをもち追求する姿を求める時、子どもが、その時々に応じた学習動機をしっかりとつことが大切になると考えた。そのような授業づくりに向けて題材を構想した。

そのために、子どもが自分の表現したいことをしっかりつかみ取ること、その表現したいことに

近づくために、自分の取り組みや表現意図に問いをもつことに重点を置いた。

教師が子どもに学びをしっかりと自覚させるためには、子どもが表したいと願っていることの中で、漠然としていることや曖昧になっているものについて、光を当てる必要がある。その光を当てるための関わりが、教師のはたらきかけとしての「掘り下げる」「提案する」ことに当たると考えた。

教師が子どもの学びや授業を評価し、適切なはたらきかけを行うために、子どもの学びを十分にとらえなければならない。表現主題や表現方法など、出会わせるものについて吟味し、子どもがそれらについてどのように向き合い取り組もうとしているのか、追求の始まりが重要になると考えた。そのために、とらえるべき子どもの姿について次の五つの点で整理している。

- ・子どもが題材のどこに思いを向け、どのように感じているか。
- ・自分が受け止めたものを、どのように作ろうと発想しているか。
- ・表したいことのために、材料や用具、表し方などをどのように選んだそうとしているか。
- ・周囲の取り組みからどのような点のどのようなよさに気付いているか。
- ・表現活動から、以後の自分の造形表現やくらしにつながる可能性に気付いているか。

「提案する」ことに中心を据えて教師がはたらきかけを行うことは、子どもに問いを生み出すために有効であった。

授業中、子ども同士の話し合いの場面をよく見るが、子どもは、自分が感じている問いを仲間にとずねて、意見を求めたり、よさを確認したりしていることが分かる。教師は、その様子を捉え、子どもの必要感に応じて、学習展開や教師のはたらきかけを修正しながら、小集団や学級全体にその考えをつなぎ、広げ、確認したり問い直したりする。すると、子どもは、気付きや確信を得て問いに対する一つの答えをもつことができる。子どもの考えは、整理・統合された状態になる。すると、子どもの追求意欲は高まり、高いままに追求が持続する様子が見えてきた。とりわけ子ども同士の関わりで見出したことへの追求意欲は高くなる傾向があり、授業後の休み時間や家庭でも作ったり、考え続けたりしている様子が見られた。

授業におけるふりかえりの場面は、学級全体での学び合いの一つといえる。「次はどのようにしたいのか」という言葉を用いて子どもの願いを引き出し、共通の視点をもって次への見通しを具体的に考えたことは、子どもが表したいと考えていることに照らし合わされ、多くの発見やつかみ取った発想が取捨選択されながら、有効なものが学びとして残る。このように子どもの個人思考と集団思考の間を問いが往来することで、学びが活性化される。ふりかえりの場面においても、教師の「掘り下げる」「提案する」はたらきかけは有効である。

自分や友だちの学びが何であったのかを明らかにしつつ、その成果や次への見通しをはっきりさせることで意欲的な追求が持続する。やったことの実感を感想に述べるだけでは気付きが浅くなる。作品を眺めた時に、「こんなことをしたんだな。次はもっとこうしたいな。」と思えるようにすることで、気付く、分かる、考える、見通しを新たに作る、願いを持つ、意欲を高めることができる。自分の学びとして学び方を獲得していくことが、追求の仕方についての手段と意欲を高めていくことにつながる。最初は無自覚でも経験を積み上げていく中で、無自覚から自覚に発展することを期待して取り組むことができた。

今年度の実践は、問いをもち、主体的に追求する姿を求めて行ってきた。子どもの願いを学習動機に高め、学びの中での気付きの質を高めることで、子どもたちが自分の作品について「重なりを感じて欲しい。」「飛び出している感じを表したい。」と語る姿が見られた。造形表現を通して学び方を身に付けたことも一つの成果と言える。

(文責 三桐 撰夫)